

子ひつじは迷わない 番外編

佐々原三月の夢一夜

ある日、みんなで子ひつじの会をしていると、ガラガラと戸を開けて漫画研究会の中瀬さんがやって来ました。頭のとっぺんで結んだポニーテイルの毛先をピョンピョンと振り回して、ずいぶんとあわてているようです。

「ひえええ。宍倉さんがモンゴルに修行に行ってしまうそうなんです。どうしましょう？」

またまたまた相談のようです。いつも切羽詰まっています。

「どうしましょう？」

「あらまあ。二回言われては、是非もないわねえ」

会長はまるやかにうなずきました。

みんなが早押しクイズを始めると、隣に居た成田くんが話しかけてきました。

「佐々原はどう思う？」

わたしはあざやかに答えました。

「こんな時は仙波さんに訊いてみましょう」

「そうだったのか」

「当然、当たり前なのです」

「なるほどな」

わたしは感心することしきりの成田くんをすぽんと引っこ抜き、隣の資料室に入りました。

そこでは、いつものように仙波さんが本を読んでいた。

「みゅー」

と鳴いたのは仙波さんではなく、仙波さんの体の下敷きになったキノコです。

「挫滅ざめつしそうですヨ。しませんけどネ」

キノコさんの声は丸っこい造作から想像される通りの甲高いものでしたが、その語り口は紳士的で優雅でした。練れたジェントルマッシュルームです。

ふと見ると成田くんが土下座していました。早業はやわざです。

「助けてセンバえもん」

「死ねばいい」

仙波さんは鬱陶うつとうしそうにネコ耳をぴこぴこ動かしました。ネコ型仙波さんです。

わたしもぺこりと頭を下げました。

「そこをなんとか」

仙波さんは盛大に溜息を吐いて体を起こしました。

「仕方がないわね。話は全部聴こえていた」

そうしてキノコさんのカサの部分のパカッと外して、中から細長いものを取り出しました。

「真面目な佐々原さんにはこれを上げましょう」

それはウサギの耳でした。わたしが受け取ると、キノコさんが「ウサギは一羽いちわ二羽にわと数えますヨ。生類しやうるい憐れあわれません」と言いました。

わたしは思い切って、ウサギ耳を頭に差し込みました。最初、ずるりと落ちてしまつて上手く刺さりませんでした。説明書を読み直してカチツと音がするまで差し込むと抜けなくなりました。

「困った時は説明書を見ると良いのです」

「そうか！」

成田くんは大きな声で納得しました。今日も元気です。

その時、カサの取れたままのキノコさんに厳しく睨にらまれていることに気付きました。わ

たしは不安になってウサギ耳を指さしました。

「ひよつとして、これはキノコさんの物なのですか？」

「いえ、違いますヨ」

キノコさんはそう言つてカポツとカサをかぶり直すと、ふいっと顔を背けてしまいました。薄暗いような顔でした。

この耳とキノコさんの間に何か深い因縁があることはお見通しでしたが、わたしにはそれ以上深入りする勇気がありませんでした。それはまた別の物語なのです。

キノコさんのためにも、わたしは頑張つて耳を動かそうとしました。しかし、どうにも仙波さんのように器用には行きません。これでなかなか、むつかしいものなのです。

しかし成田くんは、粘土細工のウサギとわたしの耳を見比べて、

「これはなかなか、よくできてるとおもいます」

と、小学生になつて褒めてくれました。

「どうも、ありがとうございます」

わたしもあの時と同じあいさつをしました。すると、ぺこりと頭を下げる動きに合わせ、ウサギの耳もぴやこりと動きました。

仙波さんはすでに読書に戻っていましたが、その分厚い本に開いたのぞき穴からわたし

たちの様子を見て言いました。

「それを持って帰ると良い」

それから「しつぽは上級者用だから渡せない」と付け足しました。

わたしは仙波さんにお礼を言うと、小さくなつた成田くんを小脇に抱えて会議室に戻りました。成田くんは手を振って仙波さんに呼びかけました。

「ありがとう、ンバえもん」

「死ね」

わたしたちが戻ると、虫の息の中瀬さんが病床に伏していました。

「ひえええ、助けて下さあい……」

わたしは愕然としました。

なんとということでしょう。中瀬さんのことをすっかり忘れていたのです。

わたしは素直に謝りました。

「ごめんなさい。仙波さんは秘密なんです」

「ひえええええ」

進退きわまつた中瀬さんはトロトロと溶けてしまいました。大変です。前々から、なん

か溶けそうだ、どうにも溶けそうだ、とは思っていたのですが、案の定、溶けました。

わたしは急いで中スライム瀬さんを集めると、こね回して元の通りに造形しました。しかしまだグズグズなので、通りがかった宍倉さんに念仏を唱えてもらおうと、感極まった中瀬さんは、

「ひえええ、行かないで下さい。そこに愛があります」

と言いました。宍倉さんは「では行くまい。その代わり野菜は食べるように」と言いました。

その時、わたしはハツとして訊きました。

「中瀬さん。中瀬さんの鳴き声を教えて下さい」

「ヌマ〜」

やっぱり！ わたしの予想通りでした！

こうして中瀬さんと宍倉さんは、仲良くお寺へ帰っていきました。

成田くんはにつこり笑って「うまく行ったな」と褒めてくれました。それから「なんかもう、松宮^{なだ}某^{たがし}とか要らないな」と続けました。はい、正真正味、要りません。

会計の宮野^{みやの}先輩は額の汗をハンカチで拭^ふいて「完敗だよ佐々原ちゃん。でも、たまたま

あたしのコンタクトレンズが外れたことが幸いしたただけなんだからね」と言いました。わたしは「もちろんですとも」と応えて宮野さんの健闘をたたえました。

「ナイスファイトだったよ」

なぜかラウンドガール姿のサトウさんから絢爛たる花束を贈られます。

最後に会長がやってきて「今夜はハーゲンダッツよ」とニコニコ笑って頭を撫でてくれました。ウサギの耳がびよんびよんと揺れました。

……………ふふふ……………

そこで目が覚めました。

*

良い夢だったので書き留めました。
恥ずかしいので誰にも見せません。

ヒミツヒミツの、ヒミツです。

(『佐々原三月の夢一夜』 おしまい)